

氏名	佐藤 裕亮
学位の種類	博士(社会学)
報告番号	甲第565号
学位授与年月日	2021年3月31日
学位授与の要件	学位規則(昭和28年4月1日 文部省令第9号) 第4条第1項該当
学位論文題目	作田啓一の「文学社会学」的実践についての研究 ——落伍者とユートピア
審査委員	(主査) 和田 伸一郎 吉澤 夏子 貞包 英之 片上 平二郎 奥村 隆(関西学院大学大学院社会学研究科教授)

## I. 論文の内容の要旨

### (1) 論文の構成

本論文は、「はじめに」「おわりにかえて」を除く6章からなる。「はじめに——作田啓一の“分裂”、あるいは「文学／社会学」という営為について」では、「なぜ社会学者が文学を論じているのか」という、作田啓一（1922～2016）に対して抱いた最初の違和感から始められ、本論文の研究の視点が「文学／社会学」という用語で示される。「1.「日本社会」という謎——〈アノミーと欲望の問題系〉と、〈罪と赦しの問題系〉」では、作田の初期の仕事から作田の生涯を貫く二つの問題系が論じられる。「2.ユートピアとしての〈過去〉——ルソーにおける「楽園喪失」のヴィジョン」では、しばしば作田の思想的転換点と指摘されてきた『ジャン-ジャック・ルソー』が〈アノミーと欲望の問題系〉と〈罪と赦しの問題系〉の延長上にあることを示すとともに、作田がルソーの文学的想像力から得た可能性と、ルソーから離脱していく契機を論じる。「3.「種子を蒔く人」——ユートピアとしての〈未来〉」では、作田の中期の「文学社会学」である『ドストエフスキーの世界』の読解を通じて、作田が〈アノミーと欲望の問題系〉と〈罪と赦しの問題系〉に対する解として「種子を蒔く人」という人物形象を考案したことが論じられる。「4.「楽園喪失」の再検討——ラカン理論によるデュルケム」では、作田が「フランス現代思想」と総称される理論的道具立てからデュルケム『自殺論』に対して行った批判的検討を通じて、『ドストエフスキーの世界』以後に作田が自身の問いを練り上げていくさまを再構成している。「5.瞬間・隙間・偶然性——〈他者〉の現れる時-空間」では、作田の後期の「文学社会学」である『生の欲動』と『現実界の探偵』の検討から、作田が「文学」を通して描き出そうとした〈現実〉の相貌を論じる。「6.「死（にゆく）者」の無辜と救済——作田啓一の晩年の思想」では、作田の最晩年のノート群を体系的に論じることを通じて、作田の思想的な到達点を「死にゆく者の立場」という言葉で示す。「おわりにかえて——儂い希望の社会学」では、作田が「文学」を参照し続けた理由を、「儂い希望」という言葉で論じる。

### (2) 論文の内容要旨

1章では、作田の初期（1950～1970年頃）の仕事の読解から、その後の仕事を規定する問題系が抽出された。戦争犯罪についての研究を通じて、作田が異質な他者を排除する暴力によって連帯を維持する日本社会の性格を発見するとともに、デュルケムの「アノミー」論の検討を通じて、戦後日本社会に「成層

化のシステム」という、人びとの社会的欲望を駆り立てるメカニズムを発見したことが論じられる。さらに、旧日本軍で下級に位置した戦犯受刑者の遺書の読み込みを通じて、作田が自己を包絡する集団を愛する論理に対しての批判的な視座を獲得した点、小説家太宰治の作品から「羞恥」という概念化を行った点が、社会の「落伍者」に着目するというその後の作田の仕事の方向性の萌芽として見出される。

2章では『ジャン-ジャック・ルソー』（1980年）が検討される。18世紀の思想家J-J・ルソーは人間が他者との比較に由来する自尊心の苦悩を知る以前の「自然状態」という幸福な状況を仮構することで、同時代の市民社会を痛烈に批判した。本章では、作田が思想家N・O・ブラウンの文明論に示唆を受けながら、ルソーを〈おとな〉への発達ストーリーを逆行（「退行」）する人物として描き出すと同時に、〈おとな〉たちの社会＝「文明社会」に対する批判的な視座をもつ社会思想家として描いたこと、晩年のルソーが記述した自然への自己喪失体験から、作田が「閉じた社会」を批判するための生涯の足場となる「溶解体験」という概念を構築したことが論じられる。しかし、ルソーが自分の考えたモデルが同時代の社会の中に生きた場合、何が起きるのかを思考実験しなかったこと、言い換えれば彼が考案した「ユートピア」が〈過去〉にしか存在しないとされた点が、作田のルソー批判の中心であると同時に、その後のドストエフスキー論への布石となることが論じられる。

3章では『ドストエフスキーの世界』（1988年）が暴力論として検討される。作田は、ドストエフスキー最後の長編『カラマーゾフの兄弟』で描かれる主人公アリョーシャの姿に、暴力によって連帯する集団の成員と、集団による共同暴力の「いけにえ」を救う手がかりがあると考えた。ここでは、作田が見出した希望を「種子を蒔く人」と呼び、概念化した。「種子を蒔く人」は集団の外部から来る〈父〉として、集団の成員に暴力がない〈未来〉の社会のヴィジョンを示す。一方、成員は「種子を蒔く人」の〈子どもたち〉として、彼が提示する集合暴力から救済された社会のヴィジョンを共有する。このように、「種子を蒔く人」という人物形象を通じて、作田が〈アノミーと欲望の問題系〉と〈罪と赦しの問題系〉に対する一定の解を提出したことが示される。

4章では『ドストエフスキーの世界』以後の作田の理論的模索が、1998年に作田が代表として創刊した同人誌『Becoming』の論稿群の検討を通じて跡付けられる。これまでの作田の仕事では、暴力の動機として個人を超越した集団や共同体＝「社会」が想定される。これに対して、本章では、作田が「アノミー」概念の再検討を通じて人間の内部にある〈力〉を対象としうる理論的参照点を探し求めたことが示される。理論的模索と「アノミー」概念の再検討の結果、作田は近代社会において「成層化のシステム」を内面化した人間が、身近な他

者との「差異化の欲望」に取り憑かれ、「空虚感」を抱えることを明らかにされたわけだが、それに加えて、本章では、精神分析家 J・ラカンの理論に基づいて作田が「空虚感」に対する処方箋として、日常の慣習化された生活からは非合理的なこととして排除される〈現実〉（作田は「現実界」と呼ぶ）に対する感受性を強化する必要があると考えたことが指摘されるとともに、その〈現実〉を探求する足場として、作田が再び「文学」を参照することが論じられる。

晩年の作田の仕事は「文学」に記述される〈現実〉を探求することが中心となるが、その方向性には大きく分けて二つあった。まずは、「文学」に描かれる、あらゆる社会的な属性を剥奪され、共有可能な尺度（言語・慣習など）を何ら有しない悲惨な相貌をした〈他者〉と対面する際のリアリティという方向性である。作田によれば、〈他者〉との遭遇は、日常生活の「隙間」（「瞬間」）に不意に起きる。5章では、「文学」に描かれるこのようなリアリティについて、『生の欲動』（2003年）に見られるラカン派哲学者 S・ジジエクへの批判や E・レヴィナス論、『現実界の探偵』（2012年）所収の島尾敏雄論、さらに「隙間」という概念の検討から論じられた。とくに本章では、作田自身が概念化しきれなかった「隙間」の概念を、哲学者九鬼周造の「偶然性の哲学」を補助線とすることで、理論的・体系的に論じられる。

6章はもう一つの方向性が論じられる。作田の考えでは、日本近代文学の作家たちは自分自身の社会的立場を放棄したり、「放心状態」に陥ったりすることで、人生の真実や生命の輝きを描き出すことを得意とした。本章では 90 歳を超えた作田自身は断片的に残さざるをえなかったノート群を渉猟しながら、作田が最晩年に見た「希望」について体系的に論じられる。作田は社会的落伍者や病者、老いた人を「死者（死にゆく者）」と呼ぶ。作田の考えでは、「死者」は自分自身を遠い未来に置いて〈いま、ここ〉をある種の「懐かしさ」とともに眺めることで、〈いま、ここ〉で生きることの儚さと輝きを見る。ここでは、作田が最晩年に見た「希望」の性格を、年老いて「呆けた」親の生活を描写する佐野洋子や岡野雄一のエッセイを参照しながら、作田が「死者の立場」概念を通じて示した「希望」を、生と死の境界が曖昧になる人がもつ、儚い人間の生に対する愛おしさとして論じられる。

「おわりにかえて」では、本論文の結論として、作田が「文学」に描かれる悲惨な人間の生の相貌と、そのような悲惨な生が一瞬だけ垣間見る「希望」を通じて、「希望」は社会の「力」ではなく、人間の〈力〉に宿ることが論じられた。

## Ⅱ. 論文審査の結果の要旨

### (1) 論文の特徴

本論文の特徴としてまず指摘すべきことは、社会学者作田啓一がその生涯にわたって探求し続けた様々な問題系のうち、その多くを占める、「文学社会学」的問題系を、初期から最晩年までの著作、論文のみならず、対談、エッセイ、書評、ノートなどを含めたコーパスから、丁寧に精査し、理論的に整理し、体系化したことである。

その体系化にあたってとりわけ指摘しておくべきは、作田啓一が、社会学に不満を持ちながら、社会学者であり続けたことから必然的に生じたねじれを、根本から理論的に精査し、それによって、社会学に別の相貌がありうること、端的に言えば、社会学の新たな可能性を作田が提示したことを明確にしたことである。別の相貌とは、以下のことである。本論文では、落伍者と呼ばれる、生きていくにあたって極めて困難な状況に置かれた人びとが、古今東西の文学や映画から、作田の初期から最晩年の仕事にわたって、数多く呼び出される。彼らは一方では、ときに精神的現実喪失に陥ったり、ときに死んでしまうが、一方で、生き残り、生き抜くこともする。作田は、こうした人びとの限界状況を乗り切る生き残り方を、哲学などの理論を独自に用いながら、概念化することによって、社会学が「取りこぼしてきた」極めて困難ながら奇跡的に生きられた生を、社会学に外挿しようとした。

この外挿に関して指摘しておくべきことは、これを行うために、作田自身、社会学を再解釈、再検討する必要があったのだが、これを、作田研究であまり参照されてこなかった小さなテキストから、デュルケムのアノミー論との格闘という形で行われたことを示したことである。すなわち、デュルケム理論の欠陥を示しつつ、それを独自に補完しながら、外挿の入り口が作り上げられたことが示された。

### (2) 論文の評価

作田は、約 40 年間大学教員として勤め、その間、日本社会学会の会長を務めたりもしながら、退官してからは、とくに、限界状況を生きる生に希望を見出す探求に専心した。その探求は、90 歳のときに最後の著作を著してからあとの、最晩年にあたる 94 歳で亡くなるまでの間に、ノートという奇妙な形で、ある種の執念をもって成し遂げられもした。奇妙な形というのは、それらがもはや論文や理論化といった形では検討不可能とでもいうかのように、論点が整理され

ず、書き散らされた形で残された文章だったからである。本論文では、これまでの作田研究では扱われてこなかった、この最晩年のノート群を、理論的に整理し、他の仕事の体系の中に組みこむ試みがなされた。このことは高く評価された。

また、本論文が、作田社会学におけるフランスの哲学者、ベルグソンの重要性を示した点も評価された。社会における落伍者を、過去に生きる人間、未来に希望を持ちながら生きる人間と整理した後、最晩年には、死者として現在を生きるという奇妙な生の在り方の発見に到達した。作田は初期からベルグソンを好んで参照してきたが、この最終到達点も、ベルグソンの時間論を独自に解釈したものであり、本論文では、この作田の時間論への関心を論文全体の軸としながら、全体の仕事が体系化された点も評価された。

以上の点から、審査委員会は公聴会終了後の最終審査会において、全会一致で同氏に対して合格の判定を行った。